



自閉児の構音異常

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学旭川分校障害児教育研究室 公開日: 2017-07-25 キーワード: 作成者: 大嶋, 留美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007628

自閉児の構音異常

大 嶋 留美子*

はじめに

自閉症といわれる子どもたちの中に、ことばの異常を持った子どもが多いことは、自閉児に接した経験があれば誰でも気づくことである。自閉児の言語の特徴(異常)として、従来、エコラリア・独語・繰り返し言語・人称の倒置・始語消失現象などが指摘されてきた。ところが、大方の予想に反してスピーチの基礎として最も重要である自閉児の“構音”に関する研究はあまりなされていない。今、自閉児にみられる言語系の崩壊の正確な本体を知るために必要なことは、自閉児の言語発達を詳しく調査し、健常児や他の障害を持った子どもたちの言語発達と比較してみることであると思われる。そこでスピーチの基礎であると同時に、言語障害の中で最も根強いハンディキャップであるところの“構音障害”にスポットをあて、自閉児の構音を調べてみたいと考えた。

1. 目 的

話しことばの発達の異常は自閉症の最も顕著な特徴の一つである。自閉児の言語については多くの学者たちが多面的に研究を試みている。特に、Rutterが1966年に言語1次障害説を発表してからは、言語発達障害と対人関係障害の相互関係に関する研究を含めて自閉児の言語に関する研究が強い関心の的となってきている。自閉児の構音障害について、Kannerは自閉児に構音障害はないと述べている。一方、Rutterは言語を発している自閉児のうち5分の2は少なくとも一時期に何らかの構音障害があることを認めているものの、「多くの症例は子音脱落を含めて最少の構音障害、あるいはその補償状態を示しており、顕著な異常を示していたのはわずかであった」¹⁾と述べている。しかし、Rutterを引きあいに出すまでもなく、自閉児の中に構音障害と言えないまでも、構音に異常をきたしている子どもが存在することは実践家であればだちに理解できる。そこで、本論文では自閉児の構音を実際に調べることにより、その発生頻度や誤り方を明らかにしたいと考えた。そのことにより、自閉児の構音異常がどの程度のものであるのか、また正常な発達の中で構音完成途上に見られる一過性のものなのか、それとも自閉児特有の構音異常というものが存在するのか、以上の点を明らかにしたいと考えた。

2. 方 法

(1) 検査方法

現在最も普及している構音テストである『ことばのテスト絵本』⁴⁾を使用し検査を実施した。このテストは12の語音の構音テストをするものであるが、一語多音方式を採用しているためテスト語は7個である。ただし構音に異常があると認められる場合、再調査を行なうための予備テスト語が26あるので全部でテスト語は33個になっている(表1)。

〈表1〉 ことばのテスト絵本
一構音テスト項目一

テスト語	テスト音声	予備のテスト語
リンゴ	リ (r) ゴ (g)	ラッパ マリ テレビ カギ タマゴ
スイカ	ス (s) カ (k)	ウサギ セミ サル トケー コイノポリ
ツミキ	ツ (ts) キ (kj)	クツ ツクエ キシャ ヤキュー
ジテンシャ	ジ (dʒ) シ (ʃ)	ニンジン ショーボーゾードーシャ ボーシ デンシャ
ゴハン	ゴ (g) ハ (h)	ガッコー ゲタ ハッパ フーセン
ゾー ヒコーキ	ゾ (dz) ヒ (ç)	レーゾーコ ネズミ ヒヨコ アヒル

(2) 対象児

この研究で対象とした子どもは、旭川市内の情緒障害児学級に通級している自閉的傾向のある子どもと北海道鷹栖養護学校に通学している自閉的傾向のある子ども(表2)であり、自閉症と明確に診断されている子どもについては自閉児全体の考察とは別に、自閉症児群だけの考察を行なった。

〈表2〉 対象児の年齢別内訳

学 年	人数	
小学1年生	9	低学年 31名
2年生	17	
3年生	5	
4年生	5	高学年 17名
5年生	7	
6年生	5	
中学1年生	3	中学生 9名
2年生	4	
3年生	2	
合 計	57	

3. 検査結果の分析と考察

(1) 健常児との比較

自閉児57名中、検査不能が7名いたので結局50名の検査結果が得られた。その結果、合格者18名、不合格者32名であった。したがって自閉児の構音異常の発生率は64%で、健常児における構音障害の発生率7~11%と比べて非常に高いものであった。表3は自閉児の検査結果と新入学児童(無作為抽出)1,125人の発音テストにおける各項目ごとの不合格者数とその比率⁴⁾を比較して

* 北海道教育大学旭川分校情緒障害教育教員養成課程

みたものである。さらに比較する両群の人数に開きがあるため、その「比率の差の検定」を行ない有意差があるかどうかを調べてみた。その結果、健常児群と自閉児群において有意差のあった構音は、1位〔dz〕、2位〔ʃ〕、3位〔r〕、4位〔ts〕、5位〔h〕、6位〔s〕、7位〔θ〕であった。この中で〔θ〕を除いては自閉児群において圧倒的に誤りが多かった音である。まず自閉児群において誤られやすかったところの音から考察を加えてみたい。

〈表3〉 構音テストにおける各項目ごとの不合格者数とその比率

テスト音	健常児		自閉児		比率の差の検定
r	45人	4.0%	16人	32%	z = 10.37 **
θ	471	41.9	11	22	z = 2.87 **
s	128	11.4	13	26	z = 3.41 **
k	5	0.4	0	0	z = 0.44
ts	61	5.4	14	28	z = 7.42 **
kj	6	0.5	1	2	z = 0.15
dʒ	9	0.8	0	0	z = 0.62
ʃ	8	0.7	10	20	z = 16.08 **
g	5	0.4	1	2	z = 1.78
h	3	0.3	3	6	z = 7.12 **
dz	112	9.5	18	36	z = 26.92 **
ç	43	3.8	2	4	z = 0.002

*|z| > 1.96, 5%水準で有意, **|z| > 2.58, 1%水準で有意

構音の誤りを分析する場合の最初の着眼点はどの音素が誤られやすいかということである。「日本語では〔s〕〔ʃ〕〔ts〕〔dz〕〔h〕〔ç〕〔F〕〔r〕を誤る頻度が高く、誤り音には摩擦音、破擦音、弾音が多く含まれており、年齢的に遅く獲得される音が誤られやすい」²⁾とされている。自閉児群と健常児群で有意差のあった6つの音は、いずれも日本語における「誤る頻度の高い音」と一致している。有意差の認められたことについては、自閉児群では64%という高率で構音の異常が発生しているためと思われる。ちなみに、健常児群と自閉児群の誤構音の発生率の高いものを比較してみると表4のようになる。第1位から第5位まで順位は違ってもその顔ぶれは全く同じである。〔θ〕を除く4つの音は、

〈表4〉 健常児と自閉児の誤構音発生率比較

順位	健常児	自閉児
1	〔θ〕 41.9%	〔dz〕 36%
2	〔s〕 11.4	〔r〕 32
3	〔dz〕 9.5	〔ts〕 28
4	〔ts〕 5.0	〔s〕 25
5	〔r〕 4.0	〔θ〕 22

いずれも前述のごとく日本語における誤られやすい音と一致しており、健常児が構音障害を起こす場合の誤構音と一致する。少なくともこの段階では自閉児の特異性は認められない。それでは、次に先ほど保留にしていたところの〔θ〕の音の問題に触れてみたいと思う。なぜ健常児群において高い誤りの傾向がありながら、自閉児群では22%の出現率でしかなかったかについては興味のあるところだがこれだけの資料か

らは断定的なことはいえない。〔θ〕は通常は鼻濁音と呼ばれている音で〔g〕のガギゲゴとは区別されている。θの誤りを聞き分けることはむずかしく、検査者の微妙な聞き取り方が問題になる音だと思われる。健常児群と比較すると、自閉児は鼻にかかった音を出すことは上手なような印象を受けた。

次に誤構音の種類とその比率について考えてみたいと思う。表5は機能的構音障害児群149名の誤構音の種類とその比率²⁾を今回の自閉児のものと比較してみたものである。誤り音の発生頻度順位については、構音障害児群で6位の〔r〕が、自閉児群では1位になっているが、他は構音障害児群1位〔s〕が4位、2位〔dz〕が2位、3位〔ʃ〕が6位、4位〔ts〕が2位とあまり大きな変動はない。誤り方についても〔θ〕を除いては、

〈表5-1〉 誤って産出された音の種類とその比率
機能的構音障害児 149名

順位	誤り音の頻度	誤って産出された音の割合				1~2位の誤り総数
		1位	2位	3位	4位	
1	s 390回	t 39%	tʃ 23%	ts 12%	k 8%	62%
2	dz 318	d 40	dʒ 22	歪み 12	g 8	62
3	ʃ 299	tʃ 62	t 20	歪み 6	k 5	82
4	ts 255	tʃ 57	k 16	歪み 14	t 6	73
5	k 229	t 59	tʃ 22	省略 13	歪み 3	81
6	r 184	d 35	省略 24	歪み 20	dʒ 4	59
7	θ 130	d 37	n 15	dʒ 11	・g 8 歪み 8	52
8	ç 126	省略 77	ʃ 9	tʃ 4	k 2	86
9	h 112	省略 67	w 19	歪み 7	t 4	86
10	F 104	省略 69	歪み 13	k 8	ts 5	82

自閉児 50名

順位	誤り音の頻度	誤って産出された音の割合				1~2位の誤り総数
		1位	2位	3位	4位	
1	r 41回	省略 56%	d 15%	dʒ 10%	b 10%	71%
2	ts 38	tʃ 94	t 3	k 3		97
3	dz 38	dʒ 55	d 7	t 3	その他3	92
4	s 37	ʃ 49	t 22	省略 11	h 8	71
5	θ 24	g 92	b 4	省略 4		96
6	ʃ 20	tʃ 45	s 35	t 15	省略 5	80
7	h 6	t 33	省略 33	k 17	w 17	66
8	ç 5	省略 60	ʃ 20	k 20		80
9	kj 2	tʃ 100				100
10	g 2	省略 100				100

〈表5-2〉 機能的構音障害児と自閉児の構音の誤り方比較

順位	誤り音	機能的構音障害児	1位	2位	3位	4位	5位
1	r	機能的構音障害児	d	省略	歪み	dʒ	j
		自閉児	省略	d	b	dʒ	n
2	ts	機能的構音障害児	tʃ	k	歪み	t	省略
		自閉児	t	k	t		
3	dz	機能的構音障害児	d	dʒ	歪み	g	t
		自閉児	dʒ	d	t		
4	s	機能的構音障害児	t	tʃ	ts	k	ʃ
		自閉児		t	省略	h	tʃ
5	θ	機能的構音障害児	d	n	dʒ	歪み・g	省略
		自閉児	g	b	省略		

1位と2位の音はほぼ構音障害児群と一致している。r/b, s/省略の誤り方は、構音障害児群でも少人数ながら出現している誤り方で特異ではない。p/bについては、自閉児特有の誤り方であるが自閉児群においても1名の子どもが誤っただけなので特異なものとして取りあげることはできない。ただ、自閉児群においては、誤って産出した構音が1位と2位にかたよっている傾向があるようである。構音障害児群では平均すると67%の割合で集中しているのに対して、自閉児群では85%の割合であった。つまり健常児の誤構音のバラつきが大きいのに対して自閉児群ではその誤り方の幅がせまいという特徴が見られた。

〈表6〉 自閉児の年齢別構音異常発生頻度

年齢	テスト不能	合格	不合格
小学校低学年31名	5名(16%)	9名(35%)	17名(65%)
小学校高学年17	2(12)	6(40)	9(60)
中学生10	1(10)	3(33)	6(67)
合計		18(36)	32(64)

〈表7〉 自閉児の年齢別による省略・置換・歪みの発生率

誤構音人数	誤構音数	省略	置換	歪み	
小学校低学年17名	121	18(15%)	103(85%)	0	
小学校高学年9	62	18(29)	44(71)	0	
中学生6	30	0(0)	30(100)	0	
合計	32	213	36(17)	177(83)	0

次に自閉児群において特徴的であったことは、「歪み」がほとんど出現していなかったということである。100%と言えなくとも、顕著な歪みの状態を呈する子どもがほとんど存在しなかった。自閉児の構音異常は省略と置換に集中しており、省略が17%であとは置換ということであった。省略は6歳で10%前後、8歳で5%の発生頻度⁵⁾であるから、歪みが少ないのと同時に省略が多いことが自閉児の特徴と言える。「省略・置換・歪み」の3種の構音上の欠陥の相対的な欠陥度の順位は、古くから最も重度のものが省略で、軽度のものが歪みであると言われてきた。よって自閉児の不正構音は、省略という重い欠陥を残しながら、置換を主流にし未だに歪みの軽度の段階に入れられない状態であると言える。表7では自閉児群を年齢別に分けて、その不正構音を省略・置換・歪みで対比させてみた。省略はさすがに中学生では皆無であったが、小学校低学年から高学年にかけては15%から29%と発生頻度が高くなっている。また表6のように、構音テスト不合格者数は年齢の変化に応じて著しい変化はなく、むしろ小学校低学年で65%、高学年で60%、中学生で67%と停滞の形をとっているのである。つまり年齢に応じて不正構音の自己訂正はなされていないと言える。

次に、健常児の音声分化と比較してみよう。ここでは、自閉児の誤る頻度が高かった〔r〕〔dz〕〔ts〕〔s〕と

といういずれの音も年齢的にどちらかという遅い段階で音声分化が進み、構音可能ということになる音である。すなわち、自閉児の構音発達も健常児とほぼ同じ音声分化をたどりながらも、しかしある一定の年齢段階から分化が滞って進歩していない状態であると言えると思う。西村辨作らは「自閉児にみられる子音分化の問題は、音声の体制化の準備期、とりわけ前言語的段階と関連が深いものと考えられる」³⁾と言い、その喃語との関連性を示唆している。自閉児が乳児期にほとんど喃語を話さなかったという事実が多いことに照らし合わせて大変興味深いと思う。喃語期における構音機構の発達が不十分であったとすれば、それは後の構音の発達に絶対的な影響を及ぼさずにはおかないであろうと推察されるからである。

(2) 自閉症児との比較

本論文の対象児の中で、医療機関において「自閉症」と診断されている子どもは19名である。この自閉症児群の検査結果は、検査不能2名、合格7名(4%)、不合格10名(59%)であった。したがって構音異常の発生率は自閉児群よりいくぶん低い結果となった。

誤り音の頻度と誤り方を自閉児群のそれと比較してみた結果は、ほぼ一致し大きな相違は見出しえなかった。

また省略・置換・歪みの発生比率を比較してみると、自閉症児群では置換94%、省略6%、歪み0%という結果であった。つまり自閉症児の構音異常は、発生率が自閉児群よりも低いばかりでなく、不正構音の重みづけにおいても、重度な形である省略が少ないということであった。

4. 総括と展望

自閉児の構音異常の発生頻度は64%で、Rutterの40%及び健常児の7~11%を大きく上回るものであった。その誤り方は健常児が発達途上で誤るところの誤り方とほぼ一致していた。しかし、加齢による自己改善は顕著ではなく、高学年になっても発生頻度の減少はなかった。ということは、誤り方は健常児の発達途上に見られるものと一致するものであっても、一過性のものであるという考え方はできないわけである。3種の不正構音については、置換の形が主流を占めるものの省略という最も未熟な形を17%も残しながら、未だに歪みにすら移行できないという状態であり、明らかに発達の遅れを感じさせられた。

また自閉症児群との比較では発生率・誤り方に大きな相違点は見い出せなかった。しかしどちらかという、自閉児群よりも自閉症児群の方がわずかながら構音異常は軽いものであるという結果を得た。

本研究は自閉児の構音異常の実態を調べることが主な目的であった。しかし自閉児の半数以上の子どもに構音異常があるとわかった以上は、それではどうすれば良いの

かということが問題になってくると思われる。このことは、今後の大きな課題である。自閉児の構音異常が言語発達に影響を及ぼし、それが社会関係の成立や自己の概念活動を制約しているのか、また逆に自閉児の社会や対人関係障害が構音の発達を妨げているのかはここでは明らかにできない。しかし今後、構音に異常を持った子どもたちを訓練し、正しい構音を獲得させた時に、対人関係障害や自閉性が改善しうる可能性が全くないとはいえないと思う。もちろん言語発達の中で構音が占める割合はほんの一部である。だが構音発達も言語発達の一部であり、重要な部分であることを考えるなら、自閉児の言語を考える時に構音の問題をぬきにしては考えられないのではないかと思われる。

㊦ 稿を終えるに臨み検査に御協力いただいた各学校の諸先生と子どもたちに心より感謝致します。

< 引用文献 >

- 1) 鹿子木敏範監訳：RUTTER 小児自閉症. 文光堂, 1978
- 2) 西村辨作：構音障害児の構音機能獲得. 笹沼澄子編：ことばの遅れとその治療. 大修館書店, 1979.
- 3) 西村辨作他：話しことばをもたない自閉症児の言語獲得障害 児童精神医学とその近接領域 21(3), 1980.
- 4) 田口恒夫・笹沼澄子共著：ことばのテスト絵本. 日本文化科学社, 1964.
- 5) Templin : 不正構音の頻度比率. 村田孝次：幼児のことばと発音. 培風館, 1970.